

## 新学習指導要領における「日本の諸地域」学習の授業構想と展開 ～「中国・四国地方」の実践を例に～

原 義 昭

### はじめに

平成20年3月に告示された中学校新学習指導要領は、これまでの方法知を重視した内容から、内容知をより多く盛り込んだ内容に変化している。具体的には、世界の諸地域学習においては、今までの「二つ又は三つの国や地域を取り上げて」から『アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニア』の各州の地域的特色を理解させる」とあるように世界の諸地域の理解に重点をおいた変更がみられる。また、日本の諸地域学習については、「二つ又は三つの都道府県を事例として選び」学習する方法から、日本を七つの地域に区分し、それぞれの地域について「七つの考察の仕方を基にして、地域的特色をとらえさせる」という学習に変化した。従来、中学校の諸地域学習の学習方法においては、いわゆる窓方式と呼ばれる学習方法がとられてきた。しかし、新学習指導要領では窓方式を復活させるのではなく、新たに地域の特色ある事象や事柄を中核として学習を進めていく方法を提示している。

平成10年に告示された現行学習指導要領以前の諸地域学習の学習方法である窓方式ではなく、新しい考え方である「地域の特色ある事象や事柄を中核として学習を進めていく方法」について実践を通して提案していく。また、その学習の進め方や課題点などについての考察も行う。

### 1. 学習指導要領の変遷と改訂内容

#### (1) 改訂のとらえ

新学習指導要領解説では、日本の諸地域学習は、「日本の様々な地域を地誌的に取り上げてわが国の国土に対する認識を深めさせるものであり、小、中、高等学校の一貫性の観点から考えると、中学校社会科地理的分野を特色付ける学習」であると記されている。

これまでの方法知を重視した地理学習において「日本の諸地域」は、その地域性を知り、地域から学ぶといった目的ではなく、あくまでも2・3の事例地域から地理的な調べ方（学び方）を学ぶことに主眼が置かれており、このことに関して批判的な意見も多かった。例えば、

◎ 方法知中心の諸地域学習について、「地誌学習の本来の意義をないがしろにするものであり、今後、諸地域学習を中心とする本来の地誌学習を再興していかなければならない」といった意見。

◎ 「地理は系統的要素と地誌的要素を合わせ持つてはじめて地域や世界をつかむことが可能となるのであって、二つないし三つの都道府県を事例に地理学習の方法知を学ぶことで、いわば日本全土の理解に『応用が利く』ものになるとはかぎらない」、「従前学習指導要領をふまえた応用が利く方法が考えられてよい」といった提案。

上記のような指摘から考えると、方法知から内容知の充実へと変化した今回の学習指導要領は、本来の日本の諸地域学習に近づいた改訂であるにとらえることができる。しかし、ここで課題となるのは、その学習方法である。諸地域学習は、以前から「地名物産地理」ともいわれ、暗記中心の単調で平板な学習に陥りやすい点が問題点とされてきた。新学習指導要領における内容知の充実、学習方法によっては再びこれまでのような事実の羅列のみの学習に回帰してしまう危険性があることも認識しておかねばならない。

(2) 日本の諸地域学習の目的とは—なぜ日本の諸地域を学ぶのか—

平成10年版の学習指導要領で大幅に削られていた世界や日本の諸地域学習が、なぜ再度盛り込まれるようになったのか、その必要性和目標について整理していきたい。

新学習指導要領における社会科の改訂の要点には、諸地域学習の内容の変更について、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得のために、「世界と日本の諸地域の地域的特色について学ぶ地誌的な学習を充実させて、世界と日本の地理的認識をより一層養うことができるようにした」と説明されている。

では、世界や日本の諸地域学習を通して行う地理的認識の育成が、なぜ中学校段階で必要なのだろうか。その目標は、公民的資質を養うことにあると考えられる。中学校社会科の目標は、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」と新学習指導要領にも記されており、世界や日本の諸地域学習を通じて地理的認識を育成し、公民的資質を養うことが求められていると言える。これらのことから、中学校における諸地域学習の目標は、諸地域の多面的・総合的理解を通して、さまざまな価値観を共有できる態度を育て、公民的資質を養うための基礎を培うところにあると考えられる。さまざまな価値観に触れ、かつ地域の特色や人間の生活に対し、共感的に理解する態度を養うためには、これまでのような2～3の地域の学習では、目標の達成はできないと考えられる。現代のような変動の激しい社会における地理の学習は、単に地域認識の育成をするだけでなく、「地域のあり方をよりよく変革するために、価値判断したり意思決定したりするといった公民的資質を養うところまで求めることが必要である」という指摘もある。

以上の理由から、新学習指導要領における日本の諸地域学習の取り扱いは、社会科の目標を達成する上でも非常に大きな変更が行われたととらえることができる。

(3) 昭和52年版および平成元年版学習指導要領における日本の諸地域学習の取り扱い

2～3の地域の学習となる以前の学習指導要領でも、7地方区分などを用いた日本の諸地域学習が取り入れられていた。ここで、平成10年版以前の学習指導要領における日本の諸地域学習の学習方法を整理しておく。日本の諸地域学習の取り扱いについて、昭和52年版および平成元年版学習指導要領において、日本の諸地域学習がどのように取り扱われてきたかを振り返りたい。それぞれの学習指導要領のおもな内容については、以下の通りである。(資料1)

資料1 昭和52年版および平成元年版の学習指導要領における日本の諸地域学習の取り扱い方

	昭和52年版学習指導要領	平成元年版学習指導要領
内容	日本の諸地域における人々の生活及び地域の特色と動向を、以下の項目をもとにして世界や他地域との比較や関連において理解させる。	
項目	(ア) 位置と歴史的背景	(ア) 自然と人々
	(イ) 自然の特色	(イ) 産業と地域
	(ウ) 資源の開発と産業	(ウ) 居住と生活
	(エ) 人口と居住	(エ) 地域の結びつきと変化
	(オ) 他地域との結びつき	
内容の取り扱い	指導の観点や学校所在地の事情によって、学校所在地を含む地域の学習と結びつけて学習の効果を高めるようにするなど、弾力的に扱ってもよい。また、指導に当たっては、歴史分野の指導との関連を考慮して取り扱う必要がある。	(ア)～(エ)に示した項目については、学習する地域によって各項目に軽重をつけて扱うように努めるとともに、各項目の趣旨に留意して、おもな地理的事象を選んで取り上げ、複雑な指導内容には深入りしないこと。

(昭和52年版学習指導要領および平成元年版学習指導要領より作成)

① 昭和52年版学習指導要領について

昭和52年版学習指導要領では、「日本の諸地域における人々の生活及び地域の特色と動向を、以下の項目をもとにして世界や日本の他地域との比較や関連において理解させる。」と記され、「(ア)位置と歴史的背景、(イ)自然の特色、(ウ)資源の開発と産業、(エ)住居と人口、(オ)他地域との結びつき」の5項目から地域をとらえ、学習を進めていくという方法をとっている。

② 平成元年版学習指導要領について

平成元年版の学習指導要領においては、「(ア)自然と人々、(イ)産業と地域、(ウ)住居と生活、(エ)地域の結びつきと変化」の四つの地域を見る項目が示されている。上述した「窓」とは、この地域をとらえるためのそれぞれの観点のことを指しており、これらの「窓」から日本の諸地域学習を行うことを通称、窓方式と呼んでいた。このような学習方法は、どのような地域区分をおこなった場合でも、ある観点からみていけば、その地域(〇〇地方)の特色が把握できたり、内容を満遍なくおさえたりすることができる。

## 2. 「日本の諸地域」をどう取り扱うか

### (1) 日本の諸地域を学習することのねらい

#### 地域的特色をとらえることができる力

地理的分野の学習では、自分の周辺のことや自分を取り巻く世界の多様性の理解が基本にある。生徒に理解させるためには、授業において地図の見方など基本的な地理的技能を習得させるとともに、地域的特色をとらえる視点や方法を身につけさせることが必要である。

地域的特色を「とらえる」とは、地域的特色を「調べ追求して、明らかにする」とことと「理解する」とことの二つの意味内容がある。このため、地域の規模に応じて自然条件と社会条件、環境条件や人間の営みなどと関連づけて考察することが不可欠なのである。

本実践では、新学習指導要領における日本の諸地域学習の一事例として「中国・四国地方」を取り上げて、その授業構想を提案する。「中国・四国地方」の範囲は広く、気候、人口、文化などさまざまな側面において多様性があり、一つの地域として特色をとらえにくい。このような場合に理解を深めるためには、新たに獲得した知識や既習の知識など、生徒がもっている知識を複合的に組み合わせていく必要がある。つまり、それぞれの地域の特色ある地理的事象や事柄を他の事象と有機的に関連づけて追求する活動を、授業の中に明確に位置づけなければならない。この活動を通して、地域的特色をとらえる力を培っていくことが大切なこととなると考える。

### (2) 地域的特色をとらえる力を身につけるための工夫

日本の諸地域学習が再び学習指導要領に位置づけられ、目標はあくまでも地域的特色をとらえさせることにある。動的な地誌学習が導入される新学習指導要領下では、主題設定から一単位時間の授業は、事象間の関連を見出させるように工夫されたものでなくてはならない。それは、決して以前の窓方式の地誌学習に戻るのではなく、現行の学習指導要領における「地域の規模に応じた調査」のねらいに極めて近いと考える。

日本の諸地域学習では、小項目の(ア)～(キ)で示した考察の仕方をもとにして、地域的特色をとらえさせることがポイントである。下の表は、日本の7地方区分(九州地方から北海道地方)の地理的な特徴を考慮し、七つの考察の仕方を当てはめたものである。

地 方	中核とした考察	取り扱う主な地理的事象(個別事象)
九州地方	(ア) 自然環境	火山, シラス台地, 台風, リアス式海岸
中国・四国地方	(イ) 歴史的背景	瀬戸内工業地域, 石見銀山, 四万十川, 過疎地
近畿地方	(エ) 環境問題や環境保全	歴史的風土, 景観保護, 琵琶湖, 世界遺産

中部地方	(ウ) 産業	果樹, 野菜, 茶, 米, 自動車, 伝統工業
関東地方	(キ) 他地域との結び付き	首都高速, 新幹線, 地下鉄, 羽田・成田空港
東北地方	(カ) 生活・文化	史跡, 城下町, 伝統産業, 祭り
北海道地方	(オ) 人口や都市・村落	札幌, 開拓使, 屯田兵村, 区画整理された農地, 過疎

上の表に示したのはあくまで一つの案に過ぎず、組み合わせの形は数多く存在する。しかし、例えどのような組み合わせであっても、小項目の(ア)～(キ)までの中核とした考察のそれぞれが分離独立しては意味がない。各地方の学習の成果を積み重ねて地域の特色をとらえるとともに、地域的特色をとらえるための視点や方法を身につけていくことが重要である。

本実践では、新学習指導要領で注目されている「日本の諸地域」の学習に焦点をあて、主題設定から調査対象地域の特色をまとめるまでの学習の在り方について提案する。具体的には、中国・四国地方を「歴史的背景」を中核として考察する場合について提案する。他の地方で「歴史的背景」を扱う方が単元および授業の構成がしやすいかもしれない。ここで強調したいのは、単元構成と授業のつくり方であり、そのことについて学習の構想と実際を以下に述べる。

### (3) 単元構成の段階

地域的特色をとらえる力を身につけさせるために有効な単元構成として、新学習指導要領に示された「日本の諸地域学習」の単元は、次の三つの段階で構成する。

- I 地域的特色を示す地理的事象を見いだす段階……………地域を概観し、主題を意識する
- II 中核とした事柄を他の事象と関連づけて追究する段階……………個別事象を分析する
- III 追究の過程や結果を表現する段階……………地域的特色をまとめる

#### ① 地域的特色を示す地理的事象を見いだす段階

この段階は、地域を概観し、主題を意識する段階であると考えられる。地域的特色をとらえるには、まず学習者である生徒全員が、調査対象地域がどのような地域であるのかを知ることが必要である。そこで、この段階では、地図や統計資料などを活用して調査対象地域を概観し、その地域のおおまかな特徴を読み取る。そして、それらの地理情報を踏まえ、調査対象地域における象徴的な事象を取り上げ、単元の主題（追究していくテーマ）として設定していく。単元の主題とは、地域的特色を追究するための適切な課題である。この主題に対する個々の生徒の反応を整理し、個別事象を分析する段階につなげていく。もちろん、設定する主題は小項目(ア)～(キ)に示された項目に適したものでなければならない。

#### ② 中核とした事柄を他の事象と関連づけて追究する段階

この段階は、個別事象を分析する段階と考える。主題（追究テーマ）に対する生徒の反応から導き出された個別事象を、丁寧に分析していく段階である。生徒から導き出された個別事象とあるが、実際は、生徒が表出するであろう意見を教師があらかじめ想定して設定しておく。これは、生徒の興味・関心を持続させ、学習に積極的に向かわせるための一つの工夫である。この段階で扱う個別事象は、中核となる地理的事象と他の事象との関連からとらえ、その成り立ちを考察していき、地域的特色をとらえるために行う。

#### ③ 追究の過程や結果を表現する段階

この段階は、地域的特色をまとめる段階であると考えられる。これまでの単元の授業を通して追究してきた主題に対して、一定の結論を出し、地域的特色をまとめる段階である。まとめる際のポイントになるのは、次のような点である。

- 既習の諸地域と比較して、調査対象地域の特色をとらえているか
- 調査して分かったことを事前の予想と比べたり、自分の解釈を加えたりして論述しているか

○ 図や表を使ったり、地図上に表現したりすることが的確にされているか

また、今までの学習を通して、追求テーマに沿ってまとめ、自分の考えを深めることができるようにしたいと考える。その際に、思考・判断したことを、根拠をもって自分の言葉でわかりやすく伝えることが大切になってくる。この活動を取り入れることで、もう一度整理し伝え合ったり、自分の心で伝え合ったり、同じ共通の課題をもっている生徒のかかわりが生かされてくると考える。

### 3. 日本の諸地域「中国・四国地方」学習の単元構想

#### (1) 単元構想の意図

- ① 「歴史的背景」を中核とした考察をする地域調査の方法を身に付け、中国・四国地方の地域的特色を明らかにすることがねらいである

本単元は、「歴史的背景」を中核とした考察をする日本の諸地域学習を行うことで、中国・四国地方の地域的特色をとらえさせることを目的としている。また、その学習の過程で地方規模における地域的特色をまとめる視点や方法について身に付けさせることをねらいとしている。これまでの学習で行ってきた地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど技能の習得や地理的な見方・考え方を深め、課題の設定や資料活用を適切に行うことによる考察・課題のまとめなどの活動を問題解決的な学習過程を組むことにより、さらに深化させ高めていくことができると考える。

授業を構想するにあたって、「歴史的背景を中核として考察するとはどのようなことか」について、いろいろな観点から検討していった。ここでの学習は、中国・四国地方の歴史的遺産は、どのようなものが、どこにあるのか、というようなことを調べてみる学習ではない。地域の産業、文化の歴史的背景や開発の歴史に関する特色ある事柄を中核として、それを国内外の他地域との結び付きや自然環境などと関連付け、地域の地理的事象の形成や特色に歴史的背景がかかわっていることからねらいに迫る学習をめざさなければならない。つまり、歴史的背景から考察するということは、過去の状況が現在に生かされて人々の生活が成り立っているということを追求することであり、過去からの変容がどのようになされたのかということをも面的な見方・考え方を身につけていくことであると考え。

- ② 中国・四国地方の学習は、日本の特色を見出すことにつながる

中国・四国地方は、日本海・太平洋・瀬戸内海という異なる三つの海に面しており、山地によって分断されているため、一つのまとまりとして諸地域学習をしていくことが難しいように思われる。しかし、産業の発達地域に人口が集中し、交通網が整備されていったという過程や、二つ以上の海に面しているという自然環境などは、他の地方でも見ることができる。また、中国・四国地方を日本海側・瀬戸内海沿岸・太平洋側に分け、それぞれの地域的特色を考察し、統合することで、内海があるという中国・四国地方ならではの地方的特殊性をとらえながら、一つのまとまりとしてとらえることができる。

では、アで述べた追求の手立てとなる過去からの変容を見るためにはどのようにすればよいのだろうか。そう考えたときに、具体的事象として3地域を取り上げ、過去の同時期での決断が、現在のそれぞれの地域に大きな影響を及ぼしていることに視点をあてていくことが有効であると考えた。また、事象については、次のような点を考慮しながら選択していくことが大切であり、検討していった。

ア 具体的事象が山陰・瀬戸内・南四国の3地域からそれぞれ選択できるところ

イ 過去のある時期の決断によって、変わっている（変わらない）ところ、決断の背景からいろいろな歴史遺産が見え、とらえやすいところ

ウ 生徒に関心をもって、過去と現在の様子がわかりやすいところ

エ ここでの学習が、他の地域の学習にも生かされるどころ

したがって、中国・四国地方を「歴史的な背景」を中核として考察することは、この地方の特色を追求していくために適切で重要な考察の視点である。また、ここで示した学習方法が、他の地域で様々な事象を学習する時に生かされ、地理的な見方・考え方が身についていくと考える。また、中国・四国地方の事例を考察することを通して、習得した見方・考え方を活用することで、他の地方の学習を進めていく上で必要とされる一般的共通性や地方的特殊性を見出す視点も養うことができると考える。

③ 生徒は、地域をおおまかにとらえる方法を学んできている

本実践では、中国・四国地方について「歴史的な背景」を中核とした考察を行う。しかし、生徒はこの段階においては、歴史的な経緯や変容が地域を特色づけるということを把握するための方法や視点は習得していない。地理的分野の学習は、世界と日本の地域構成について学習することから始まり、写真や映像など具体的な資料を準備し、世界や日本の地域構成や生活の舞台としての地球の姿を大観させ、世界の国々や地名、地図などに関心を高める活動を行ってきた。また、地図の読図や作図、景観写真の読み取りなどについて技能の習得に力を入れてきた。また、社会事象に対する関心・意欲の高い生徒が多く、身近な出来事に関心をもち、疑問に感じたことを意欲的に追求することができるように思われる。授業後に振り返りを記録しているが、多くの生徒が自分の気づきや疑問を取り上げている。

本単元の実践にあたり以下のような事前調査を行った。主な結果は、次の通りである。(抜粋)

設問1 「あなたが、中国四国地方の県で訪れたことのある県はどこがありますか。」

- ・鳥取県 (35人)    ・山口県 (22人)    ・広島県 (35人)    ・岡山県 (33人)
- ・香川県 (17人)    ・愛媛県 (10人)    ・徳島県 (7人)    ・高知県 (6人)

設問2 「中国・四国地方といえば、あなたにはどのようなイメージがありますか。」

- ・自分の住む地方・地味・影が薄い・あまりよく知られていない・田舎・関東に比べて田舎
- ・事件が少ない・神様が集まる(出雲)・山陰と山陽、山陽は雨が少ない、四国は暖かい
- ・人口が少ない・自然豊か・山や島が多い・川が多い・どの県も海に面している
- ・国際的・交通が不便・伝統工芸品が多い・中国地方は田舎の名産品、四国はうどん

設問3 「中国・四国地方について、あなたが知っていることをできるだけたくさん書きましょう。」

- ・山陰、山陽、瀬戸内などに分かれる・山陽新幹線・山陰本線・一畑電車・国道2号、9号線・瀬戸大橋・政令指定都市(広島、岡山)・世界遺産が三つくらい・大山・鳥取砂丘・境港・ゲゲゲの鬼太郎・名探偵コナン・二十世紀梨・羽合・広島東洋カープ・マツダスタジアム・原爆ドーム・サンフレッチェ広島・厳島神社・鹿・路面電車・カキ・お好み焼き・もみじまんじゅう・後醍醐天皇・後鳥羽上皇・若槻礼次郎・中海・宍道湖・しじみ・出雲大社・松江城・雪舟庭園・石見銀山・水族館・原子力発電・プルサーマル計画・瀬戸内海・鞆の浦・壇ノ浦・桃・桃太郎・チボリ公園がなくなった・秋吉台・サファリパーク・錦帯橋・ふぐ・なつみかん・山口からたくさんの総理大臣・木戸孝允・瀬戸内工業地域・さぬきうどん・水不足・愛媛みかん・坊ちゃんスタジアム・阿波踊り・坂本龍馬は高知出身・四万十川・長宗我部氏・毛利氏

事前調査より、中国・四国地方という区分の中で、生徒が訪れたことがある先は、中国地方に集中し、四国地方にはやや距離感があるように思われる。イメージとしては、田舎で地味であるところとらえる生徒が多数いた。また、生徒のこの地方に対する知識(情報)は、多方面にわたっていることがわかる。

(2) 単元の学習段階

中国・四国地方で歴史的な背景から変わってきた理由を考えることで、中国・四国地方の地域

的特色を明らかにしていく。

本単元では、歴史的分野の学習も生かし、中国・四国地方の特色について、歴史的背景とのかかわりから追求する。しかし、歴史的背景には時代差があるため、共通性は見いだしにくい。そこで、戦後の日本が大きく変容する高度経済成長期の選択・決断という視点から共通している事象を探り、三つを選択した。具体的には、ア「石見銀山」、イ「瀬戸内工業地域のコンビナート」、ウ「四万十川の清流」についてである。そして、3の(3)で示した学習過程の段階を大きく、I地域の特色を示す地理的事象を見いだす段階、II中核とした事柄を他の事象と関連づけて追求する段階、III追求の過程や結果を表現する段階の3段階でとらえ、ねらいに迫ろうと考える。

Iの段階では、「中国・四国地方は、どのようなところだろう」という問いかけから入り、この地方に対するイメージマップを描かせる。事前調査からも明らかになった様々な事象を取り上げ、分類していく中で歴史的な内容を拾い上げ、歴史と結びついた地域のとらえ方に気づかせたい。

さらに、過去（高度経済成長期）と現在を比較させ、「なぜこの地域は変わった（変わらない）のだろうか」ということから地域の変容に注目させる。その際に、その時期に大きな決断・選択があったことを示し、そこから追求していくテーマを設定していく。ここでは、

- ① 石見銀山の保存 ～歴史や伝統、遺産をどのように生かそうとしたのか～
- ② 塩田と瀬戸内工業地域コンビナート ～伝統工業の遺産が近代工業にどのように生かされたのか～
- ③ 四万十川の清流 ～川との共存をどのように守ってきたか～

を、大きな柱となるテーマの視点として習得すべき内容の中核に据えて、追求段階でテーマがより具体的になっていくように学習を進めていきたい。

IIの段階で具体化された追求テーマについてグループごとに調査活動を行い、課題解決ができるよう促していく。調査活動については資料の収集や活用する力が必要になってくるので、三つの事象について十分な資料を収集できる手がかりを準備し、見通しを持った活動ができるようにする。追求テーマについてかかわりを持たせながら、まとめていくことができるようにしたい。自分とは違った見方・考え方をもつ他者とのかかわり合いによって、これまでの見方・考え方をゆさぶる活動場面を設定していく。

最終的（IIIの段階）には、大きくは「中国・四国地方は、どのようなところだろう」という問いかけに立ち戻るが、「高度経済成長期の決断、ここからわかることは何か」ということを今までの学習を通して、追求テーマに沿ってまとめ、自分の考えを深めることができるようにしたいと考える。その際に、思考・判断したことを、根拠をもって自分の言葉でわかりやすく伝えることが大切になってくる。この活動を取り入れることで、もう一度整理し伝え合ったり、自分の心で伝え合ったりして、同じ共通の課題をもっている生徒のかかわりが生かされてくると考える。

### (3) 活動展開計画（全7時間 本時7/7）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	中国・四国地方は、どのようなところなのだろうか調べてみよう。	1	・中国・四国地方は、どのような地域なのかを全体的に概観する。(県名, 地形, 気候, 歴史的背景など)
2	地域の変化に気づき、グループで追求するテーマを設定しよう。 (なぜこの地域は変わったのだろうか)	2	・中国・四国地方の地理的事象の形成や特色に、歴史的背景が大きく関わっていることに気づき、追求テーマを把握する。 ・三つの地域の過去（高度経済成長期）と現在を比較し、変容をつかむ。

3	<p>課題を解決しよう          &lt;予想されるテーマ&gt;          ・石見銀山は、どうして世界遺産になったのだろうか          ・塩田がなぜコンビナートに変わったのだろうか          ・四万十川はなぜ清流のままなのか          (「高度経済成長期の決断により、どのように変容したのだろうか」)</p>	3 4 5	<p>◎ 課題解決のためのグループ別調査活動を展開する。          &lt;追求の視点&gt;          ○歴史や伝統をどのように生かしているか(保存)          ○伝統工業と近代工業がどのように発展してきたか          ○地域開発は、どのように進み、どのような問題が生まれてきたか(開発と環境保護)          &lt;予想される調査活動について&gt;          ・歴史的な遺産をかかえ、そこに暮らす人々の様々な工夫について調べる。          ・瀬戸内の塩田が古くから発達した要因を考え、社会の変化に対応して大きく変貌している様子について調べる。          ・南四国を例に、環境問題に対する関心を高め、今後の中国・四国地方のあり方について、開発と環境保全の両面から調べる。</p>
4	<p>自分の考えを深めよう          「高度経済成長期の選択！ここからわかることは何か」</p>	6 ⑦	<p>・追求テーマについて、グループごとに発表する。          ・今までの中国・四国地方の学習を通して、中国・四国地方の特色を追求テーマに沿って自分なりにまとめる。</p>

(4) 評価計画

次	時	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	社会科における思考力・判断力・表現力
1	1	調べることにより情報を得ようとしている。	歴史的背景から考えようとしている。		地方の全体像を理解している。	地方の全体像を把握するときに、どのような方法で、どのような観点で見ていくのかを考えている。
2	2	進んで追求テーマを見つけている。	地域の変容に気づき、理由を考えようとしている。	資料を比較して、違いをとらえている。		具体的な事例から、わかることを見つけ出し、何が問題なのか、なぜそうなったのか、課題を見つけ出そうとしている。
3	3 4 5	多くの情報を探し出そうとしている。	現状をとらえ、様々な要因から判断している。	適切な資料を収集し、わかりやすくまとめている。		設定した課題について、調べたり、まとめたりすることから、地方の変容や人々の選択について考えている。
4	6 ⑦	学習を振り返り、共有化しようとしている。	他者の考えも受け入れ、選択の理由を考えている。	自分のまとめたことをわかりやすく説明している。	地域の発展には、歴史的な背景が関わっていることを理解している。	友だちのまとめや説明を聞くことで、その時の歴史的背景や人々の選択が現在の姿を表していることを多面的に考えようとしている。

(5) 第7時の学習計画

① ねらい

今までの学習を通して発表された「高度経済成長期の決断」を追求テーマに沿って自分なりにまとめることができる。



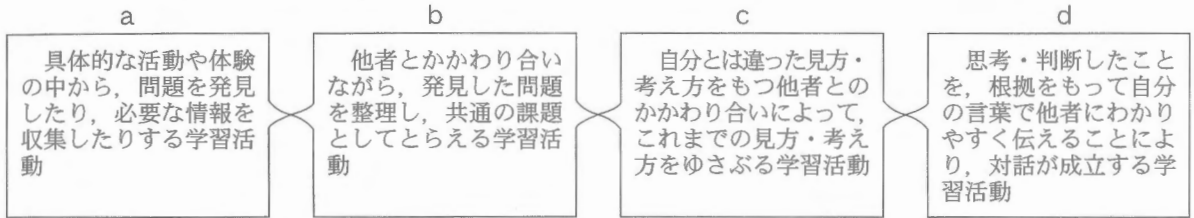
② 展開

学習場面と子どもの取り組み	教師の支援と願い・評価
<p>1. 前時までの学習をふりかえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・取り上げた地域はどこであったか (石見銀山・瀬戸内工業地域・四万十川)</li> <li>・追求テーマはどんなことだったか</li> <li>・前時はどんな発表があったか</li> </ul> <p>2. 本時の学習を確認する。</p>	<p>教師の支援と願い・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料を提示しながら、今までの学習の流れがわかるように追求してきたテーマを確認する。</li> <li>・写真資料により、変容を再確認し、テーマの視点(大テーマ)を絞っておく。</li> </ul>
<p>三つの「高度経済成長期の決断からの変容」を追求テーマに沿ってまとめよう</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「高度経済成長期にどんな決断がなされ、どのように変容したのか」についての発表を聞いて、自分の考えをまとめ、深めよう。</li> </ul> <p>3. 追求テーマについてグループで調べてきたことを、テーマごとに発表する。</p> <p>＜予想されるテーマ＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○石見銀山は、なぜ世界遺産になったのか</li> <li>○四万十川は、どうして清流のままなのか</li> <li>○なぜ大コンビナートができたのか など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習が意識できるように、学習の流れに位置づけて黒板に掲示する。</li> <li>・発表者は、調査をまとめた資料を使い、制限時間内に発表できるように助言する。</li> <li>・発表を聞く側は、気づいたこと、疑問に思ったことなどを発表ごとにメモを取るようように伝える。</li> </ul>
<p>4. 発表から、気づいたことや疑問に思ったことなどを出し合う。</p> <p>発表からわかることは、どんなことか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和32年に大森町文化財保存会が、住民の人たちによって結成された。</li> <li>・昭和30年代までは、塩田だった。</li> <li>・ダム建設など計画はなかったのだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発言の内容を、出てきたものから順に黒板に掲示していき、どのテーマと関連があるのか確認した後で、分類しながら掲示し直す。</li> <li>・掲示し直されたものから、それぞれの地域との関連をつかむことができるようにノートに整理することを確認する。</li> </ul>
<p>5. 3地域の「高度経済成長期の決断」について、自分の考えが深まったことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最初から歴史的遺産が保存されていたわけではなかった。地元の人たちの保存しようという運動から現在があるのではないか。</li> <li>・塩田が衰退した理由を考えることができた。この決断は、立地条件も関わっているのではないか。</li> <li>・変わらないという決断があったから今の四万十川の清流がある。自然に残っているわけではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三つの地域についてそれぞれ自分の考えを整理できるように、まとめ方を指示する。</li> <li>・考えが深まったこととして、どのようなことが取り上げられたか、お互いに発表し合うことを伝えておく。</li> <li>・「3地域を調べた過程で共通したことは何だったのか」「決断の要因は何か」「現状をどう考えるか」といった視点からの問いかけをすることにより、総合的にまとめられた発言を促す。</li> </ul>
<p>「3地域で調べた過程で共通したことは何だったのか」「決断の要因は何か」「現状をどう考えるか」についても自分の考えをまとめよう。</p>	<p>評価の観点(思考力・判断力・表現力)</p> <p>これまでの学習を生かし、多面的に考えることができたか</p> <p>【評価方法：発表・ワークシート】</p>

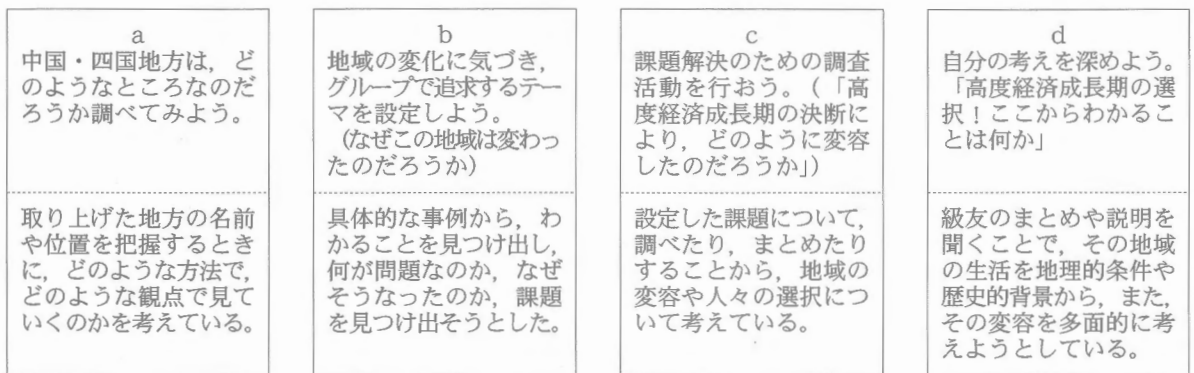
## 4. 中国・四国地方の授業実践

### (1) 学び合う場面の単元構成とめざす姿

単元の構想では、三つの段階で学習過程をとらえていたが、次のような学習活動を取り入れることで学び合いの場面を設定していった。



かかわり合いの学習活動の場面を実際には次のように位置づけ展開していき、表の下側に示す姿をめざした。

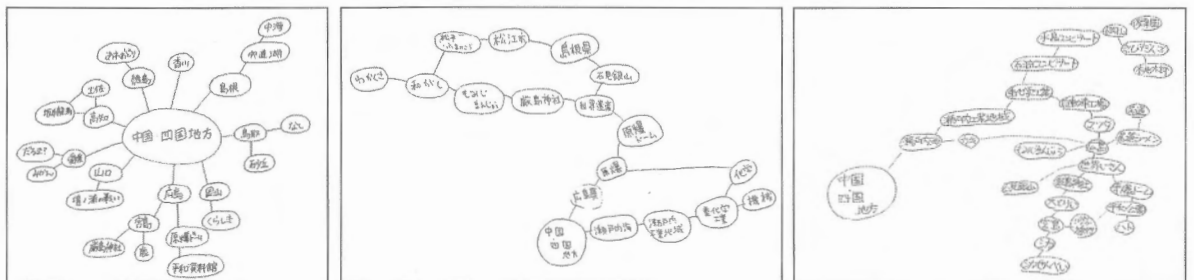


### (2) 授業の実践

① 中国・四国地方は、どのようなところなのだろうか……第1時

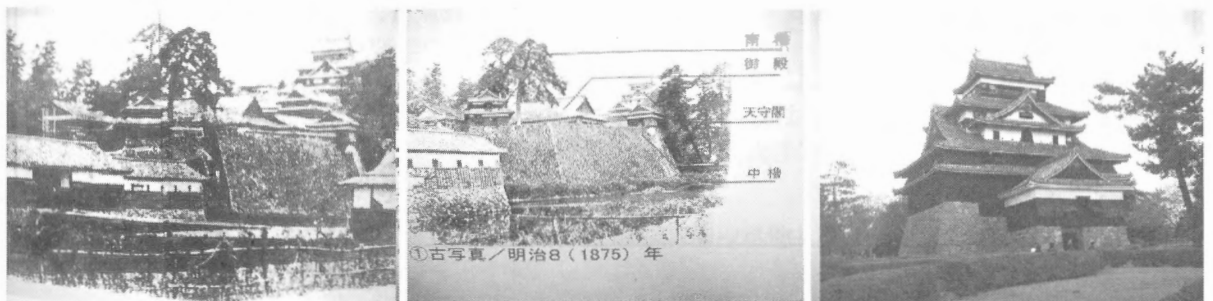
中国・四国地方は、どのような地域なのかをイメージマップに表す

中国・四国地方どのようなところなのか自分のもつ初発のイメージから授業を始めた。(県名、地形、気候、歴史的背景など) 単語的に書き出されたものがほとんどであった。



② 地域の変化に気づき、グループで追求するテーマを設定する。……第2時

歴史的な背景からの追求の事例として、三つの地域のをテーマ設定する前に松江城の事例を示した。



明治初期の松江城と現存する松江城を提示し、松江城が現存する経緯を調べ、国際文化観光都市松江における松江城を保存する決断について学級全体で学習していった。(なぜこの地域は変わったのだろうか) という学習課題の設定へとつなげていった。

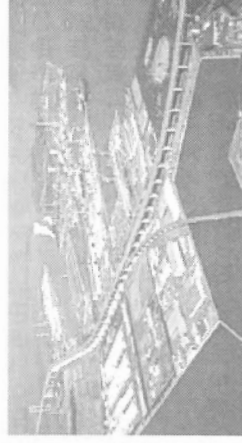
中国・四国地方の地理的事象の形成や特色に、歴史的背景が大きく関わっていることに気づき、追求テーマを把握し、三つの地域の過去(高度経済成長期)と現在を比較し、変容をつかむための調査活動につなげていった。

③ 「課題を解決しよう」……………第3・4・5時

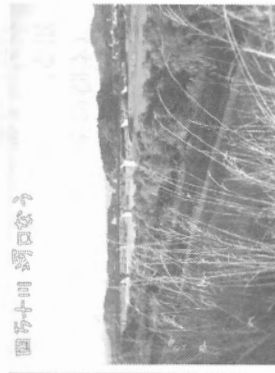
三つの地域を選択し、課題解決のためのグループ別調査活動を展開した。中心となる課題は、次のようになっていった。

- ・石見銀山は、どうして世界遺産になったのだろうか
- ・塩田がなぜコンピナートに変わったのだろうか
- ・四万十川はなぜ清流のままなのか

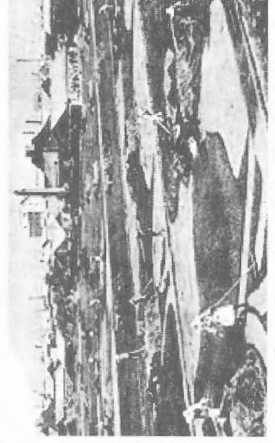
教師からの働きかけとして、「高度経済成長期の決断により、地域はどのように変容したのだろうか」「という問いを投げかけ、高度経済成長期に調査の時期的な視点をもたせるようにした。



▲瀬戸内最大級の工業地帯・番の州



四万十川 河口から



▲かつて塩の町として栄えた坂出。臨海部は塩田でした。

中国・四国地方 ～3つの地域の決断～

3つの地域 ①石見銀山(世界遺産)・瀬戸内工業地帯(伊予国松山市)・四万十川(徳島県)	キーワード:なぜこの地域は変わった(変わったのか)のだろうか。
課題	石見銀山 現在までの足跡
課題の背景	「銀の発見」 「銀の発見」は、銀の発見の足跡が現れた。 「日本」 「日本」 「日本」
課題の解決	「石見銀山」 「石見銀山」 「石見銀山」
課題の解決	「石見銀山」 「石見銀山」 「石見銀山」

中国・四国地方 ～3つの地域の決断～

3つの地域 ①石見銀山(世界遺産)・瀬戸内工業地帯(伊予国松山市)・四万十川(徳島県)	キーワード:なぜこの地域は変わった(変わったのか)のだろうか。
課題	四万十川の翁を救った人々
課題の背景	「四万十川」 「四万十川」 「四万十川」
課題の解決	「四万十川」 「四万十川」 「四万十川」
課題の解決	「四万十川」 「四万十川」 「四万十川」

中国・四国地方 ～3つの地域の決断～

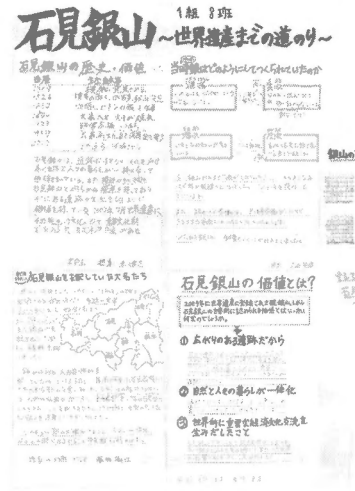
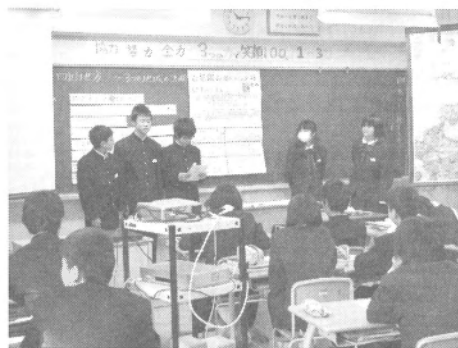
3つの地域 ①石見銀山(世界遺産)・瀬戸内工業地帯(伊予国松山市)・四万十川(徳島県)	キーワード:なぜこの地域は変わった(変わったのか)のだろうか。
課題	水たぬき
課題の背景	「水たぬき」 「水たぬき」 「水たぬき」
課題の解決	「水たぬき」 「水たぬき」 「水たぬき」
課題の解決	「水たぬき」 「水たぬき」 「水たぬき」

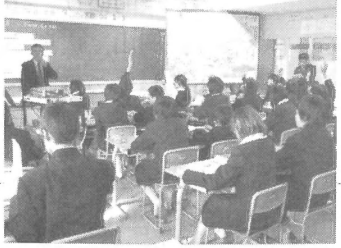
ワークシートで一度調べたことを整理し、テーマ追求のまとめをしていった。

④ 「高度経済成長期の選択！ここからわかることは何か」……第7時を例として

この時間の具体的な学習内容は、「三つの『高度経済成長期の決断からの変容』を追求テーマに沿ってまとめよう」である。前時までの学習で、三つの追求テーマについて調査活動を進めてきた。そして、三つの地域の変容の実際と原因が明らかになってきた。本時の学習では、このことから中国・四国地方の地域的特色を考えるために、「3地域を調べた過程で共通したことは何だったのか」「決断の要因は何か」「現状をどう考えるか」といった視点からの問いかけをすることにより、総合的にまとめられた発言を促していくことをめざした。学習の流れと学習形態は、次の通りである。

(学習内容) (形態) (授業の実際)

<p>1 前時までの学習について確認し、本時の学習のテーマを知る。 (本時の学習テーマの把握)</p>	<p>一斉 (全体)</p>	<p>前時までの学習の確認 ○取り上げた地域はどこであったか (石見銀山・瀬戸内工業地域・四万十川) ○追求テーマはどんなことだったか ○前時はどんな発表があったか (主なテーマ) 四万十川の命を救え 瀬戸内工業地域博士になろう 瀬戸内工業地域は、なぜここまで発展したのか なぜ石見の国に銀山があるのか 石見銀山～世界遺産までの道のり～ 四万十川には、なぜダムがないのか 四万十川はなぜ今まで清流だったのか 石見銀山は、銀がでないのになぜ残されたのか ※3つの地域の「高度経済成長期の決断からの変容」を追求テーマに沿ってまとめよう</p>  <p>・本時の学習内容を把握し、見通しを持つことができるように、前時までの学習をふり返った。8班に分かれて、追求テーマをもとに三つの地域の変容を調べてきたことを確認した。 ・三つの地域の変容は、どこから始まったのか、何が暮らしを変えていったのかということ、を、「高度経済成長期」に視点をあて学習することを意識させることができた。</p>
<p>2 追求テーマについてグループで調べてきたことを、テーマごとに発表する。</p>	<p>一斉 (全体)</p>	<p>各班の追求テーマ ①四万十川の命を救え ②瀬戸内工業地域は、なぜここまで発展したのか ③瀬戸内工業地域博士になろう ④なぜ石見の国に銀山があるのか ⑤石見銀山～世界遺産への道～ ⑥四万十川には、なぜダムがないのか ⑦四万十川はなぜ今まで清流だったのか ⑧石見銀山は、銀がでないのになぜ残されたのか</p>  <p>・発表されていない3班が、調べたことを発表していき、黒板に貼れるようにした。三つの地域について取り上げるにより、自分たちの調べたこととそれ以外の地域との比較や内容の確認をすることができ、中国・四国地方の変容があった地域の同時期の動きがつかめ、課題意識をつかむことができた。</p>

<p>3 発表から、気づいたことや疑問に思ったことなどを出し合う。</p>	<p>一斉 (全体)</p>	<p>○発表の内容から類別したこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和32年に大森町文化財保存会が、住民の人たちによって結成された。</li> <li>・昭和30年代までは、塩田だった。</li> <li>・ダム建設など計画はなかったのだろうか。</li> </ul>  <p>生徒たちの発言は、すでに具体的事象一つ一つを別々のものとして取り上げるより、共通することを関連づけている内容が多く、逆に具体的な事例の特徴を明らかにしていくことに視点をおいて考えるようにはたらしかけていった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気づいたことが内容別に整理できるように、3地域について類別して板書していった。</li> </ul>
<p>4 地域の「高度経済成長期の決断」について、自分の考えが深まったことをまとめる。</p>	<p>一斉 (全体)</p>	<p>最初から歴史的遺産が保存されていたわけではなかった。地元の人たちの保存しようという運動から現在があるのではないか。</p> <p>塩田が衰退した理由を考えることができた。この決断は、立地条件も関わっているのではないか。</p> <p>変わらないという決断があったから今の四万十川の清流がある。自然に残っているわけではない。</p> <p>決断の違いについての意見が多く、決断の要因からとらえる見方が強いことがわかった。「3地域を調べた過程で共通したことは何だったのか」「決断の要因は何か」「現状をどう考えるか」といった視点からの問いかけをすることにより、総合的にまとめられた発言を促していった。</p>

## 5. 考察と今後の課題

### (1) 中国・四国地方をどう取り扱うかについての成果

新学習指導要領に基づく地理的分野の学習の進め方について、中国・四国地方を事例に、「動態地誌的な取り扱いの方法を工夫する」「社会的事象の意味や価値を整理する」という2点について取り組んだ。

#### ① 動態地誌的な取り扱いの仕方を工夫する

動態地誌的な取り扱いというのは、以前のように、自然環境、人口、産業、交通などの地理的事象を各地方ごとに繰り返し網羅的に扱うのではなく、地域の特性や新しい動きや変化に重点を置いて地誌を記述することである。そのためには、地域の特性や地域性をダイナミックに扱うことが大切である。新学習指導要領に例示してある「考察の仕方」に基づき、内容を厳選して授業を構成する必要がある。中国・四国地方の授業構想を通して、網羅的な学習からの脱却ができなければ、学習は展開することはできない。

そこで、今回の実践で「歴史的背景」を中核として考察する仕方についての有効性を考えてみた。中国・四国地方の学習において、地域的特色をとらえようとするとき、一般的に人口や都市・村落を中核とした視点からとらえられやすいように思われる。しかし、実際には次のような点から、地域の産業、文化の歴史的背景や開発の歴史に関する特色ある事柄を中核として、それを国内外の他地域との結び付きや自然環境などと関連付け、地域の地理的事象の形成や特色に歴史的背景がかかわっていることからねらいに迫ることが有効であったと考える。

ア 前述した事前調査からみると、生徒の知識(情報)には、かなり歴史的背景に関わるものがあり、生徒の関心・意欲、認識の点からもこの地域を歴史的背景からみることが学習活動を展開していく上で重要であった。

イ 中国・四国地方は、山陰・瀬戸内・南四国の3地域から構成され、地域間の結びつきや人口の地域的偏り、自然環境や産業を歴史的背景に注目しながら追求することができた。また、松江、岡山、広島、高松、松山、高知などは、城下町として発展し、それぞれの地域の中核都市としての役割を果たしている。石見銀山、原爆ドームなどの世界遺産をはじめ、歴史的な遺産、建造物や伝統産業が現在に残る地方でもあり、それらを保存・継承し、観光などに活用する試みがみられる。

ウ 人口の分布にも違いが見られ、瀬戸内には政令指定都市がある一方で、山陰・南四国には過疎化が著しい村落もあり、これらの変容や要因を、産業の変遷や高速交通網の整備などによる結びつきのからも多面的に考察することができ、過疎・過密の問題がどのような課題となっているのか歴史的背景から考えることのできる教材であった。

本単元においては、これまで学習したさまざまな知識や技能を活用し、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を身につけるために工夫を凝らした。また、いくつかの事例を資料から読み取り、一般的共通性や地方的特殊性に分類して考察させ、とらえる観点によって地理的事象が大きく変化することにも生徒たちは気づいていった。第7時の学習では生徒一人一人が自分の意志決定に根拠をもち判断理由を明確に発表させることで、思考力・判断力を高められたと考える。

② 社会的事象の意味や価値を整理する

今回の実践は、平成24年度からの完全実施に向けて、日本の諸地域の学習についてどう取り扱っていかねばならないのかについて、地域の特色ある事象や事柄を中核として学習を進めていく方法について実際の授業を通して提案していくことであった。そして、授業を行っていくためには、授業で扱うべき地理的事象の選定とその分析が重要であることが改めて確認できた。特に、主題を設定して行う動態地誌的な学習では、どのような事象を授業で扱うかは授業の生命線とも言える。そのために綿密な事象分析が必要である。下の表はその分析の一例であり、事象を五つの側面から分析したものである。このような分析を通して、授業で取り扱うべき社会的事象の意味や価値を整理し、授業構成や評価に生かしていくことが重要である。

石見銀山の五つの側面（存在・関係・構造・変化・広がり）からの分析例

存在	<p>【世界遺産】</p> <p>石見銀山のもつ普遍的価値</p> <p>① 世界的に重要な経済交流を生み出した。</p> <p>② 伝統的技術による銀生産方式を豊富で良好に残す。</p> <p>③ 銀生産から搬出に至る全体像を不足なく明確に示す中世から世界を駆け巡った高品位な銀を生み出した。</p>
関係	<p>【他とのつながり】</p> <p>石見銀山遺跡は、572haに及ぶ広大な核心地域の中に、銀山だけでなく、銀の積み出しのための港と銀山を結ぶ二つの街道、町並み、山城が含まれている。</p> <p>交通網の整備は、山陰と山陽、近畿地方や九州地方など他の地域との結び付きを可能にした。当地間の都市間における人やモノの流れをスムーズにし、地域間の交流をさかんにした。</p>
構造	<p>【調和と共生】</p> <p>銀生産とともに周辺の山林を育成し、緑化を行い、自然景観を大切に、調和・共生する環境という21世紀への極めて貴重な提言ができるモデル的な産業遺産である。（世界遺産委員会で高い評価を得る）</p>

変 化	<p>【転機と要因】</p> <p>1957年 大森町文化財保存会が結成される。</p> <p>1969年 日本初の鉱山遺跡として国史跡に指定される。</p> <p>1987年 大森の町並みが重要伝統的建造物群保存地区になる。</p> <p>2000年 石見銀山観光ボランティアガイドの会が発足する。</p> <p>2001年 世界遺産暫定リストに登録される。</p> <p>2006年 世界遺産推薦書をユネスコ世界遺産センターが受理。(推薦資産の名称は「石見銀山遺跡とその文化的景観」)</p> <p>※保存の決断が、世界遺産登録へとつながった。(世界遺産センター展示室に掲げられた登録認定証の写しは、石見銀山を愛する地元の人々の行動と努力の証しである。)</p>
広 が り	<p>【影響と変容】</p> <p>○ 大森に観光客が増えてくると食事と休憩施設が必要となる。そこで、熊谷家の酒蔵の無償提供を受け、移築して現在の「おおもり会館」ができた。</p> <p>○ 古い物を残そうという機運が盛り上がったころ、邇摩郡役所解体の話が持ち上がった。市から建物の無償払い下げを受け、石見銀山資料館ができた。</p> <p>○ 大森・銀山の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。そして、石見銀山は世界遺産となり、観光客も増えた。</p> <p>※世界遺産に登録され、多くの人々が訪れる地となったが、町民の暮らしは以前と変わらない。竹の伐採や草取りなどに黙々と取り組んでいる。保存会の会長は「建物や町並みの維持は大変。でも町民がこの町を誇りに思うからできる」と語っている。</p>

これらの分析から単元構成や発問計画につながっていかなければならないと考える。

## (2) 今後の課題

平成24年には完全実施となるが、現在は、新学習指導要領の実施までの移行期間である。移行期間に、地理的分野の学習の全体像をつかみ、地理学習の完全実施の姿に近づけていく必要がある。地理学習は、もともと地理的事象を環境との関係から考察し、動的に見ていく学習である。よって、最終的に地理学習において生徒に獲得させる価値的知識とは、生活や産業などの地理的事象を、自然的条件や社会的条件として整理される周囲の環境との関係から説明した知識をいうのであると考える。つまり、地理的分野における価値とは、「生活と環境」そのものを指すのである。教師自身が価値的知識を見出すことができずに、生徒にそれらを身に付けさせていくことは難しい。まずは、拠り所となる学習指導要領に示されていることの理解から始め、様々な実践を試みていくことが重要である。

## 参 考 文 献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領』平成20年3月告示
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』平成20年9月
- ・堀内一男 編著『中学校新学習指導要領の展開 社会科編』明治図書, 2008
- ・牛込 裕樹『中学校における日本の諸地域学習の方法』(特集論文 第2回[全国地理教育学会]), 2009
- ・『平成21年度 島根大学教育学部附属学校園研究紀要』2009
- ・『平成22年度 島根大学教育学部附属学校園研究紀要』2010

他

(はら よしあき 社会科 harayo@edu.shimane-u.ac.jp)